

カトリック仙台司教区・カリタスジャパン 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

第3回 東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議

2013年6月25日(火)～27日(木)、第3回 東日本大震災仙台教区復興支援全国担当者会議が、日本カトリック司教協議会主催で開催された。参加者は、各教区、修道会の復興支援担当者で、今回は63人が参加した。

この会議は、毎年1回開催されるもので、今年は、A-Cの3コースに分かれ、被災者の体験やボランティアの体験を聞きながら、初日と2日目は各グループによって別々のところを周り、2日目の夕方に全員が郡山教会に集まった。全員が揃い、郡山教会で懇親会を行い、それぞれが巡った被災地の印象などを語り合いながら、親交をあたためた。最終日の27日は、全体会で、全国の小教区、教区の取り組みの事例発表が行われ、最後に「犠牲者を追悼し、被災者への癒しを求め、復興支援活動に祝福を求める」ミサが平賀徹夫仙台教区司教の主司式でささげられ、派遣の祝福を受け、閉会した。

Aコース 岩手・宮城県沿岸部視察コース 福岡教区 伊東成晃

6月25日

・宮古～大槌～釜石～鵜住居～大船渡～陸前高田～米川ベース

6月26日

・米川～南三陸～原町ベース～小高～浪江～請戸小学校～郡山



«6月25日(火)»

Aコースのメンバーは正午過ぎ、スタート地点の宮古ベース(宮古教会)に集まった。

スタッフの案内・諸注意

に続いて、平賀司教様のお言葉、お祈りを経て早速バスに乗り込んだ。事前にメンバーの紹介などなかったが、平賀司教様と一緒にするのはとても心強い。A、B、Cの3コースの中でも、このAコースが最も過酷だと聞いていた。その最も厳しい道りを司教様と一緒にくださるのは、他教区の者にとっては、またとない旅路であるような気がした。

当日はお天気も良く、初日という事もあって会話も弾む。宮古や大槌の町並みを見ながら、ほどなく大槌ベースへ着いた。

私は去年もこのコースに参加したが、宮古も大槌も去年に比べて、さほど復興が進んでいない気がした。瓦礫は片付いたが、次はどうするのか? がうまく決まっていないうだ。とりあえず町全体を2メートルほど盛り土する工事が始まるらしい。

なんとも大事業だが、一部の土建屋だけが潤うような事には、なっていない。本当に復興を待ち望む被災者の方々の笑顔につながるような大事業になればと思う。その町は、そこに住んでいた人たちのものだし、その土地の人が幸せにならなければ、それは復興ではないはずだ。

この盛り土工事にともなう、大槌ベースも移転を余儀なくされており、現在、新ベースが現地点よりもやや釜石よりに開設準備中である。この秋にも運用が始まるようだ。

現在ベース長の川口助祭様が、丁寧に説明してくださった。遠く九州からやって来て、ベースの管理、スタッフ・ボランティアをまとめていくのは、大変骨が折れるに違いない。長崎管区を代表してご尽力してくださっている助祭様に心から感謝申し上げます。



大槌ベースを発ち、鵜住居地区へ。去年も訪れたが、去年まであった小学校などは解体されて跡形もなかった。津波に呑まれてホームだけが残った駅が何とも恐ろしかった。改めて津波の破壊力を思い知らされる。

しかし釜石市街では、仮設住宅の次のステップ『復興住宅』が完成していた。もうすでに入居が始まっていて、明るいニュースであった。ちょっとオシャレな市営住宅といった感じであった。

さまざまな復興の形を見ながら、大船渡へ。私の印象では、この大船渡が、一番復興が早いような気がする。震災が起こった年の夏に訪れた時は、本当にぐちゃぐちゃでひどい有様だったが、去年には既にどこが被災した場所なのかかわからないぐらいになっていたし、今年はさらに復興が進んでいる気がした。

そして、陸前高田で慰霊の祈りを捧げ、米川ベースへ。車窓から『奇跡の一本松』が見えた。スーパー堤防などがあっけなく破壊されていく中で、ただの松の木が耐え抜いた事は本当に奇跡としか言いようがない。そして同時に大自然を軽んじていた人類への警告であるようにも思われた。人はもっと謙虚に大自然に寄り添って生きるべきなのかも知れない。

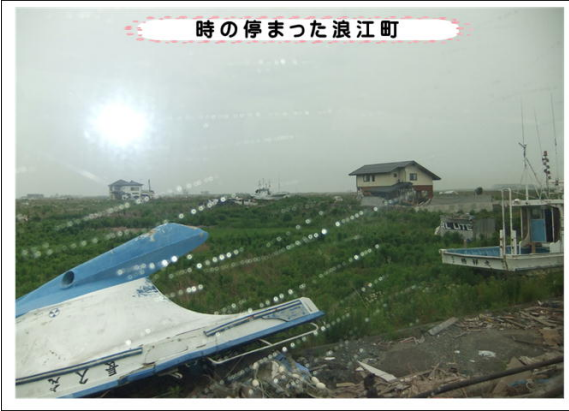
傾き始めた陽射しの中をマイクロバスはひた走る。交通事情もあり、大幅に予定を遅れて初日の宿である米川ベースに到着。息つく暇もなく、南三陸で漁業の復興に尽力されている漁師の方のお話を聞く。何もかも破壊し尽くされ失った中で、生きる気力さえも折れそうだったが、カリタスをはじめ、色んな方々の励ましを経て、何とかホタテを出荷出来るまでに至った経緯をお話しくくださった。30代ぐらいの若い感じだ。家族や身近な人々のお世話もしながら、漁業の復興に取り組む姿勢には、とても頭が下がる思いである。お話の後、やっと遅い夕食、一日のわかちあい。入浴もなく大部屋で雑魚寝。こんな大部屋で寝るのは、大神学校以来だった。



«6月26日(水)»

米川教会で朝ミサを捧げ、犠牲者の追悼を行った。朝ごはんもそこに、南三陸町志津川へ出発。カリタスの支援で完成したデイサービスセンターを視察し、復興商店街『さんさん商店街』へ。地道に商売をして頑張る人、震災ですべてを失った人もいれば、震災で富を得た人もいるようだ。なんとも言えない思いを抱えながら一路福島県へ。

高速道路をひた走り、お昼過ぎに相馬市原町ベースに到着。お弁当をいただいて、小高地区・浪江町方面へ出発。折しも小雨が降り始めた。浪江町は福島第一原発から10km圏内、問題の原発へとまさに肉薄した感じだ。眼に映る光景は、町全体が全くあの日のまま。倒壊した家屋、あり得ない場所に転がる漁船...あの日のままの小学校の3月の掲示物! 悲しみがこみ上げる。軽薄な政治家が「原発で死んだ人は、1人もいない」などと言った。彼女はこの光景を見たのだろうか? 怒りを通り過ぎておかしくなりそうだ。



冷たい雨が悲しみの町を包んでいく。いつか本当に帰れる日が来るのだろうか？ 重い重い気持ちを抱えながら、激しさを増す雨の中をバスは郡山へ。またまた遅れながらも事故もなく、無事に郡山市内に入った。バスは綺麗なホテルに到着、やったー！今夜は昨夜の分までゆっくり

りくつろげそうと思ったら、実はホテルを間違えたようだ。すったもんだの末に本当の宿に到着。高級ホテルとはいかないが、小綺麗なビジネスホテルで、今夜はベッドで寝られそうだ。チェックインを済ませると足早に郡山教会へ。もうすでに他コースの方々は集合されており、懇親会のために私達を待っていてくださった。

和やかな雰囲気の中、郡山教会の信徒の方々が用意してくださった美味しい料理の数々をいただきながら、あちらこちらで様々な話題に花が咲いた。中でも札幌教区の新しい司教様の選任のニュースは、とても喜ばしいものだった。東西南北、本当にオールジャパンの教会が、ひとつになって日本中に福音を届けられたらと思う。今まさに日本の教会の真価が問われているのではないだろうか？ 本当にこの社会に福音を届けられるかどうか。みんなで襟を正し知恵をしぼり、汗を流さなければと思う。

《6月27日(木)》 全体会議・ミサ

最終日は、全体会議とミサが郡山教会聖堂で行われた。それぞれの教区・教会、修道会などの一年間の取り組みなどが発表された。前日までの視察で気力体力ともに限界に近かったが、皆で想いと意気込みを新たにし、さらなる支援活動への力を得た。最後に皆で主の祭壇を囲み、神様の恵みと祝福を頂いた事で、またさらに力が湧いてきた。私達の前に立ち足る問題はとてつもなく大きい、しかし神が共にいてくださり、共に生きる仲間が沢山いるということは、無限の励みでした。皆のこの想いを胸に、また現場で頑張りたいと思う。泣き言や不平不満をどんなにまき散らしても何も変わらない。ただひたすらに小さな愛の業を積み重ねて行くことだけだ。どうぞ明日はひとつでも誰かの笑顔が増えますように！

B コース 福島県南回り視察コース
カリタスジャパン 鈴木 まり

6月25日

・会津若松教会～二本松教会～二本松

6月26日

・二本松～いわき教会～いわきサポートステーションもみの木～
檜葉町・富岡町方面～郡山

《6月25日(火)》

会津若松教会にBコース、Cコース参加者が集合し、小松史朗神父の挨拶と祈りでプログラムが開始。沖縄慰霊の日の小学生の詩「私たちがやっていることが特別なことでなく、当たり前のことになればいいなと思う」を引きながら、「東日本大震災を受けて祈りをともに」小学校版を皆で捧げた。

その後、会津若松教会では、県内自主避難者連絡会の方々とお会いし、福島市から避難された2名の方から話を伺った。



◆県内自主避難者連絡会 2名の方のお話◆

自主避難したことによる親子関係の不調和、福島市に残したご両親に対し親不孝しているという思い、自主避難に対して避難先の方から非難されるため、福島市から来たことを隠さなければならないという現状が語られた。そして、今の望みは、震災前の普通の生活がしたいということ。

もう1名の方は、いわき出身だが、これまで原発教育を受けたことも原発施設を見学したこともなかったということ、震災後、制限された生活によってご自身と子どもが肉体的にも精神的にも弱り、体調を崩したことが語られました。そしてご主人の転勤を機に、会津若松に来て、やっと空気が吸えるということを実感し、気持ちが軽くなったとのこと。



また、自主避難生活を経済的な理由から続けることが出来なくなった方が、震災前の住居へ戻った際に、周辺の方との間に溝の深まりがあり、学校や保護者同士でのいじめが存在する。全員が被害者であるのに、そういう問題が起きてしまうのはとても悲しいことだと話された。

お話を聞いた後、小松神父を案内役に二本松教会へ移動。二本松教会では、後藤ファーム専務の後藤正人さんとカトリック二本松幼稚園園長の佐藤せつ子さんの話をうかがった。

◆後藤正人さんのお話◆

震災発生後から現在までご自身が行ってきた農業について話された。震災後、放射能に対する不安を少しでも払拭しようと独自の測定や検査を実施し、土壌改良や安全な情報を提供することなど、放射能に対する不安を少しでも払拭しようと、やれることはやるという姿勢で農業を行っている。

消費者の方々へは、食に対する正しい知識を持ってほしいと願っている。現状、食に関する情報は自分で求めないと得られない状態。また、テレビなどのマスメディアは、自分たちの報道したいことだけを取り上げて報道し、消費者はそれを鵜呑みにしてしまうため、マスメディアの影響の大きさと怖さを指摘された。今こそ情報を知り、広めてもらう時期。近づかない、しゃべらない、触れないという体制では、何も変わらない。正しい判断をするため、ご自身で知る努力をしていただき、正しい知識をもとに判断してもらいたい。そして偏見や差別を少しずつなくしていければ良い。

◆佐藤せつ子さんのお話◆

震災当日から現在までの幼稚園の状況や対応について話された。震災時、幼稚園職員の保護者から人間の価値を崩すような言葉を浴びせられたり、復旧事業に関して、本部と連絡が取れない中で、行政からは書類提出に対する高圧的な命令口調での度重なる催促があったりと、精神的に辛かった。そしてそのようなときには、何より相談できる人が欲しかった。

現在の幼稚園の状況として、職員が毎朝遊具をふいていること、保護者からの理解を得るため、細かくお便りを出すことで情報発信していること、水道水に不安をもつ家庭には、園児に水筒を持ってきてもらうなど、少しでも保護者の不安を減らすために対応している。そして、災害時の連絡についても十二分な連絡先把握をするようにしている。やれることはやろうと言っているが、職員たちは本当によくやってくれている。

問題としてとらえていることは、市や県の職員の子どもが一番先に避難することから、申し訳ないけれど、ゆとりのある方が皆避難していて、子どもたちは平等だけれども現実はどういうことかと思う。

二本松教会での話の後、宿泊先へ移動し、この日の予定を終えた。

《6月26日(水)》

この日は、午前中にいわき教会、もみの木を訪問し、原発近接地を視察後、郡山へ移動して他コースと合流した。



まず訪れたカトリックいわき教会では、チェスワフ神父、チーム平・堂根の皆さんが迎えてくださり、聖堂で祈りを捧げた後、信徒会館で出張カフェのように、地元のお菓子と季節の果物、美味しいお茶をいただきながらチーム平・堂根の責任者・佐々木三代子さんから話を伺った。

◆佐々木三代子さんのお話◆

避難所への物資支援から始まり、現在は雇用促進住宅に住む被災された方にむけてのサロンを開いて関わりを持っているということが語られた。あえて被災された方を被災者とは呼ばず、住民の皆さんという言い方で接しており、また、最初から「カトリック教会」と名乗って、そのままの自分たちを知ってもらい、活動したことから、現在も良い関係が続いており、理解してもらっている。住民の現在の関心事は、復興住宅について。

また、いわき市には、震災前からいわき市に住んでいて被災された方と原発地域から避難されている方がいる。現在、原発地域からの避難者数は23,000人にのぼり、精神的ダメージに対する補償の有無の違いや、避難者なので区費は払わないという原発地域避難者がいたり、様々なことがあり、いろいろなことが起こる。

私たち信徒は何をしたらよいのか。もみの木も手伝ったと言われるが、年を重ねており、全部のことが出来ないのが現状。できる範囲のことを継続的に今後も行っていきたいと思う。

佐々木さんから話をうかがった後、もみの木に向けて出発。もみの木では、ホアン神父、スタッフの高橋ユリさん、吉田さんが、香り高い「もみの木ブレンド」コーヒーを淹れて、一行を迎えてくださった。

◆吉田さんのお話◆

原発避難者に対して誹謗中傷があること、原発避難者はなかなか仕事が見つからない、賠償などについて正しい理解がされていない現状が語られました。いわき市の方々とのお付き合いの仕方も、色々な市民感情から難しいことがうかがえました。子どもたちの中でいじめについては聞かないが、県外ではよく転校や登校拒否の話を書くとのこと。



◆ホアン神父様のお話◆

これまでのもみの木の活動について紹介がありました。現在は、ニーズも状況も変わってきており、先の見えない状況で、課題も多く、1年のスパンで考えることは難しい。ただ、少しでも前向きに進進して希望を持ってほしいということが大事ではないか。時間があるときは、ぜひ一度もみの木を訪れて、ボランティア活動を体験し、現場でしかわからないことを感じてくださるとの話があった。



檜葉町について説明される半谷さん(左)

昼食後、視察の案内をしてくださる檜葉町役場の半谷(はんがい)さんが、もみの木で合流。もみの木では、市内に複数ある檜葉仮設での出張カフェの内容や企画を相談し、情報共有を図るなど協働していることを話された。

その後、視察は、もみの木から常磐バイパス、国道6号線に出て、いわき市で津波の被災を被った久ノ原から北上し、広野町を抜けて、除染活動が行われている檜葉町内をバスで視察。天神岬公園高台から木戸地区を臨み、平日日中に数人の職員が交替で勤務する檜葉町役場(トイレ休憩)、さらに北に向かい、富岡町の状況を視察した。

◆半谷(はんがい)さんのお話及び説明◆

いわき市内では、被災したが新しく建て替えられた場所と被災した状態のまま全く手つかずの場所があることが見て取れた。

また、各町村で警戒区域の見直しが行われたが、警戒区域解除となった広野町では、震災前の1割~1割強の人口しか戻っていない現状が語られた。

さらに、昨年8月に住むことはできないが、立ち入りが自由となった檜葉町について、放射能の問題から、被災家屋の修理も手つかずで、家屋内も野生動物の侵入により、どんどん酷くなっていく一方。田んぼは草が生え放題。ライフラインの復旧が追いついていない現状が語られた。

除染作業についても、中間貯蔵施設が決定していないため、仮置き場にある保管量が増える一方。仮置き場の用地交渉をしていかないと除染も進まない。自宅敷地内の除染を行っても、置き場がないので家の側に置いてあり、そのようなところに帰れと言われても帰れるのかと心配の声が聞かれる。



中間貯蔵施設が決まっていないため、仮置き場に置かれている除染廃棄物

檜葉町では、26年3月に帰還宣言(帰還宣言する時期を判断する)ということになっているため、一生懸命除染作業を行っているが、一斉に除染するという形ではないこと、保管施設の建設問題もあることから、町民から大丈夫なのか?という声がある。

檜葉町役場でトイレ休憩。カウンター内には日直の方が数名いた。また、ロビーでは除染作業用線量計の貸出・返却のため、東京電力のスタッフがテーブルを1本出していた。

その後、富岡町を視察した。富岡町は、除染が行われていない。3月25日から帰宅困難、居住制限、準備区域と3区域に再編され、ある程度出入り自由となったが、震災が起こった当時のままの町。5年間は帰れないと言っているが、5年後に果たして帰れるのかと勝手に思う。まだ屋内でも1.7ミリシーベルトある状態。無色透明な放射能は、どこが危ないというのが目で見てわからないため、放射線量の不安がまだまだある。

これまでの生活との大きな違いによる精神的な苦勞や、高齢者においては順応するまでに時間がかかること。また、そのようなことから、いわき市内で様々な問題が生じてしまっているのではないかと。

高齢者はやはり帰りたい。若い方たちは、ちょっと悩んでいるというのが現状。

その後、郡山へ移動し、翌日、全体会議に出席した。

手つかずのままの JR 富岡駅と周辺地域



震災で落ちたままの屋根瓦



住宅側に置かれた除染廃棄物(右下)

「被災者の話」 会場 松木町教会 原発事故からの今…「忘れないで」

松木町教会 鈴木キミ子

Cコース 福島県北回り視察コース

6月25日

・会津若松教会～福島市 松木町教会～二本松

6月26日

・二本松～飯舘村経由 南相馬市 原町教会～南相馬 小高地区及び浪江町方面視察～原町ベース～郡山

はじめに

松木町教会の被災者支援活動は、教会規程に基づき、2009年2月に設立された「愛の支援グループ」が中心となり、皆様のお祈りとご協力により活動しています。

大震災直後から「愛の支援グループ」として、私たちが奉仕したことは、相馬市への写真洗浄ボランティア、福島市内の「あづま総合体育館」第一避難所への物資の支援活動、炊き出し手伝い、心のケアとしてふれあい茶の湯による「もてなしの傾聴」ボランティアなどでした。避難所が閉鎖されるようになった9月からは、福島原発事故で避難している浪江町の方々が住んでいる宮代仮設へ「ふれあい茶の湯」をベースとし、2年になる今も東京教会管区、CTVCの支援によって互いに支え合ってきました。さらに、今年の4月からは、野田町教会の皆さんも心を一つにして活動しています。



今回のCコースの支援担当者会議のテーマ「被災者の話」により、宮代仮設住宅自治会から2名の方を松木町教会にお招きして話をうかがいました。また、福島に住んでいる私たちも、原発事故による放射能問題の被災者であることから「愛の支援グループ」を代表して、私が話をさせていただきました。

(1) 浪江町・宮代仮設住宅自治会

会長 萩野虎夫氏、 副会長 阿部義之氏によるお話

浪江町の除染は、今も手つかず（9月から始まる予定）。町を見に行くたび悲しくなる。たとえ、ふる里に帰れないかも知れないと分かっていても、やはり、家に帰りたい気持ちはある。しかし、日が経つにつれ荒れ果てた現実を見て、「帰れない、帰らない」と考えざるを得ない人たちも多くなってきていると思う。

仮設住宅は、2年が3年に、さらに4年と延ばされ、浪江町の場合、仮の町も災害復興住宅も具体的に先が見えていない。この様な現実には悔しさがある。動物やネズミの被害など手のつけようもなく、帰るたびに家の傷みが進み、人が住める状態ではない。時間が止まったままの町の現実を皆さんにできることなら見てほしい。そして、この仮設住宅に住んでみてほしいという気持ちすらある。

また、放射能被害による差別を考えると不安である。例えば、車のナンバーを「いわき」から「福島」に変えたが、全国的には、かえって、差別の目で見られるのではないかと心配している。

このように沈みがちな仮設住民の心をボランティアの皆さんは癒してくれている。元気になるよう仮設に来てくれていることは、本当にありがたく感謝している。特に、カリタスさんのイベントは住民の皆さんが、とても待っているようである。

（「愛の支援グループ」よりコメント）

「あの事故さえなかったら」という思いは、今も強い。仮設住民が自治会を中心にして助け合って元気に生きていかなければという思いが生まれていると思う。仮設集会所の前には「5年後に生きている自分」と書かれている。しかし、中には、体調を崩されてくる方々がでてきていることは事実のようである。私たちの支援としては「ふれあい茶の湯」をベースとしながらも、3.11以前の生活に少しでも近い年中行事や男性も参加しやすいイベントを入れながら、これからも笑顔届け支え合っていこうと考えている。

(2) 「愛の支援グループ」代表の話（被災者として）

福島市に住んでいる私たちも含めて、福島県中通りの住民は、避難区域ではないが、放射能による被災者といえる。放射能のことは、今も頭から離れることはない。ある程度、除染は進められているかもしれない。専門的なことについては、どの学者の見解を信じるかは人様々であり、行政も政府も信じられなくなっている面がある。自主避難者を責めることもできない。しかし今、様々な葛藤をしながらも福島市内（中通り）に住んでいる人の方がはるかに多い。原発事故からの傷跡に声を上げられないでいる。それは、差別の目を恐れているからであろう。

差別は、他人事と考えることによって起こる。自分事として考えなければ、差別もなくなるし、寄り添うということも、単に言葉だけになってしまう。

今のところ、何が正しくて、何が間違っているのか一線を引くことはできないと思う。福島の苦しみを忘れてほしくない反面、将来差別されるのではないかという不安との矛盾した複雑な気持ちの中で私たちは生活しているのである。

おわりに

原発事故によるこの痛みは、もしかしら福島に住んでいるものにしかならないのかも知れません。だから言えます。「二度とこのようなことを起こして欲しくない。同じ苦しみをしてほしくない。」福島の原発事故は収束していません。苦しきも、悔しさも、なくなっています。私たちは、一人ひとりが支え合って元気っぽくしていないと前に進めないのかも知れません。だから、自然と皆、元気っぽくなっています。でも、それは、復興しているのではないのです。

福島の原発事故を全国、全世界の一人ひとりが自分事として共感できたなら、原発事故の怖さ、悲しさ、苦しき、悔しさに心から寄り添えると思うし、神から賜った美しい自然、尊い命を原発事故によって破壊される恐ろしさも忘れられることはないでしょう。

私たちは、与えられたこの苦しきを心に受け止め、祈り未来の光を信じ、今、元気に生きようとしているのです。自分たちより苦しんでいる人たちへ寄り添い、ささやかであっても笑顔届けている支援活動によって自分たちも元気になる。今できる小さなことに心をこめることによって支え合えることを実感しています。

「今日も元気！ きっと明日も元気！ そして、いつも笑顔でいられますように！」と今を生きています。

最後に、全国の皆さまのお祈りと笑顔届けてくださっている沢山のボランティアの皆さまに心から感謝しています。

これからも福島の現状に寄り添っていただけましたら感謝です。そして、真の平和のために、原発廃止につなげてほしいと思います。

